

続々『百人一首図絵』を読む（承前）

名護 峻河 藤川 功和

由良木陽向

はじめに

『百人一首図絵』は、文化四年（一八〇七）に刊行された、『百人一首』の絵入り注釈書です。三冊本で、「歌仙絵」と歌人達の「古説系図」と身分ごとに作者を分類した「百人一首作者部類」とを一冊に纏めたものと、一首ずつの歌の内容を絵で表した「歌意絵」を纏めたもの二冊で構成されています。『百人一首』関連の書籍は江戸時代に数多く刊行されていますが、それらの中でも本書は歌意絵の独自性等から、先学によつて注目されています（注一）。

本稿は、本誌前号に掲載した『百人一首図絵』の読み解きの続きです（注二）。未だ不明な点も多くありますが、江戸時代の『百人一首』享受の一端を

ご紹介できればと思います。

本稿での担当箇所は以下の通りです。

十三番 陽成院 藤川

八〇番 待賢門院堀河 由良木

八九番 式子内親王 名護

（注一）松村雄二氏『百人一首 定家とカルタの文学史』（平成七年、平凡社）、鈴木健一氏「描かれた百人一首の世界 歌意絵の変遷をめぐって」『ユリイカ』第四四卷一六号、平成二四年一二月、青土社）。

また、宮本祐規子氏「田山敬儀『百人一首図絵』翻刻（一）」『会誌』三一号、平成二五年四月、日本女子大学大学院の会、「田山敬儀『百

人一首図絵』翻刻(二)」「『会誌』三二号、平成二六年三月、日本女子大学大学院の会)、一田山敬儀『百人一首図絵』翻刻(三)」「『会誌』三三号、平成二七年三月、日本女子大学大学院の会)において歌意絵の翻刻がなされている。

(注二)『尾道文学談話会会報』第四号(平成二五年一月)、『尾道文学談話会会報』第八号(平成二五年二月)、『尾道文学談話会会報』第九号(平成三一年二月)、『尾道文学談話会会報』第十号(令和二年二月) 参照。

凡例

- 一、尾道市立大学付属図書館蔵『百人一首図絵』[911.1 / 198]を底本とした。
- 一、「歌仙絵」「歌意絵」の各図版と本文を載せた。
- 一、翻刻の方針は以下の通り。
- イ、字体及びルビは底本のままとした。
- ロ、行取りは適宜あらため、読解の便を考慮し、句読点、濁点等を付した。また、割注には()を付した。
- ハ、文意不通等が認められる場合は、該当箇所右傍に(ママ)を付した。

一三番 陽成院

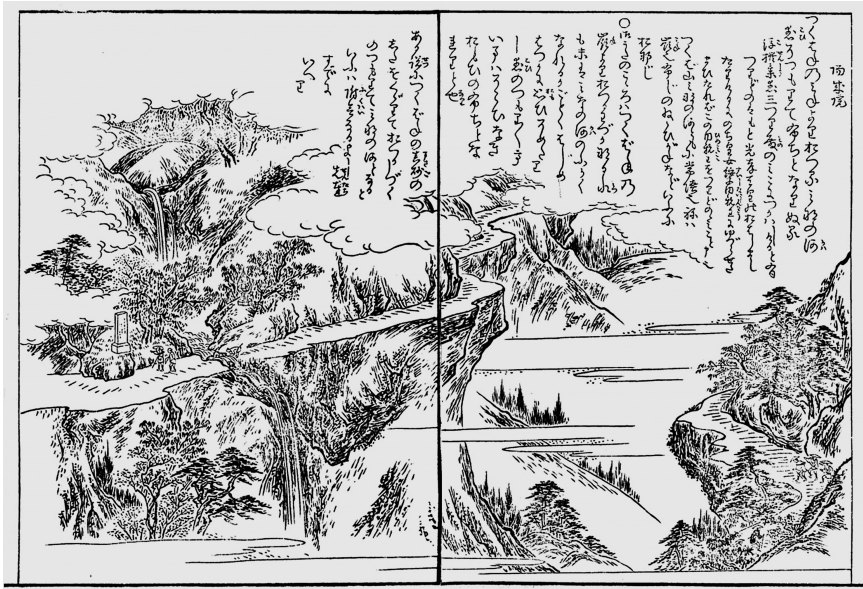
〔歌仙絵〕



【翻刻本文】

陽成院(御父清和天皇、御母二條后、御諱貞明)つくばねのみねよりおつるみなのがはこひぞつもりて涙となりぬる

〔歌意絵〕



陽成院

つくばねのつねをまつふしづくの河
あつたよめて多うとかなとぬふ
ほ標ま三つを流のこころふれをる
つづくのつねと光孝天皇のおはしまし
なまふらふのちをなすけのつねとよ
そひなれがの船はさうさうとて
つづくのつねと光孝天皇のおはしまし
なまふらふのちをなすけのつねとよ
そひなれがの船はさうさうとて
つづくのつねと光孝天皇のおはしまし
なまふらふのちをなすけのつねとよ
そひなれがの船はさうさうとて

○つづくのつねと光孝天皇のおはしまし
なまふらふのちをなすけのつねとよ
そひなれがの船はさうさうとて
つづくのつねと光孝天皇のおはしまし
なまふらふのちをなすけのつねとよ
そひなれがの船はさうさうとて
つづくのつねと光孝天皇のおはしまし
なまふらふのちをなすけのつねとよ
そひなれがの船はさうさうとて

あつたよめて多うとかなとぬふ
ほ標ま三つを流のこころふれをる
つづくのつねと光孝天皇のおはしまし
なまふらふのちをなすけのつねとよ
そひなれがの船はさうさうとて
つづくのつねと光孝天皇のおはしまし
なまふらふのちをなすけのつねとよ
そひなれがの船はさうさうとて

あつたよめて多うとかなとぬふ
ほ標ま三つを流のこころふれをる
つづくのつねと光孝天皇のおはしまし
なまふらふのちをなすけのつねとよ
そひなれがの船はさうさうとて
つづくのつねと光孝天皇のおはしまし
なまふらふのちをなすけのつねとよ
そひなれがの船はさうさうとて

陽成院
 つくばねのみねよりおつるみなな河恋ぞつもりてふ
 ちとなりぬる
 『後撰集』恋三、つり殿のみこにつかはしけ
 ると有。つりどのはもと光孝天皇のおはしまし
 たりけるに、のち皇女綏子内親王にゆづらせた
 まひたれば、この内親王をつりどのゝみこと申
 也。
 つくば山、みなな河、ともに常陸也。ねは嶺
 也。ふじのね、かひがねなどいふにおなじ。
 ○御うたのころは、つくばねの嶺よりおつるわづ
 かなる水も末はみなな河のふかくなれるがごとく、
 はじめはつかに思ひそめたりし恋のつもりくて、
 いまはそこひなきおもひのふちとなれりと也。
 ある説に、つくばねの真砂のしたをくゞりておつ
 るしづくのつもりてみなな河となるといふは付会
 なるよし、先達すでにいへり。

【翻刻本文】

【解説】

歌意絵の注は、はじめに他書所伝（『後撰和歌集』恋三・七七六）の詞書を引用し、陽成院がこの和歌を贈った相手「釣殿」が、光孝天皇の皇女綏子内親王であることを指摘します。『百人一首』には八人の天皇・院の詠が撰ばれていますが、このうち恋歌は当該歌と崇徳院詠「瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわれても末に逢はむとぞ思ふ」（七七七）のみです。また、崇徳院詠は、『久安百首』という院自らが企画した百首歌の一首として詠作されたことが知られています（「ゆきなやみ岩にせかるる谷川のわれてすゑにもあはんとぞおもふ」）。つまり当該歌は、『百人一首』中唯一、天皇が恋しい相手に贈った実詠歌ということになります。

一方、歌意絵に目を転じると、和歌に詠み込まれた筑波山の峰から流れ落ちる男女川（水無川・美那川等とも表記）の様子が画面左半分に描かれています。筑波山の峰から流れ落ちる急流を描く構図自体は、既に『基箭百人一首抄』（延宝八年（一六八〇））などにも確認されますが、当該歌意絵では、画面右下に山上を目指す登山者を、また画面左には山道を登ってきた登山者が男女川の水を飲もうとしている

姿を描くなど、筑波山の険しい山道の様子を詳細に描出しています。

ところで、歌意絵左端には碑と思しきものがみえます。この碑に関しては、安永九年（一七八〇）に刊行された『筑波山名跡誌』の「男女川」の項に以下の記述が見えます。

○男女川 みなのがは 此河絶頂に程近く道^{みち}を遮る細流^{ほそながれ}なり。二神の社地^{しやち}の下より出れば男女川と名付る也。禁^{ふし}に落^{おち}ては桜川^{さくらがは}といふ。川のはじめ至^{いた}つて細^{ほそ}ければ、遠^{とほ}来の雅人^{みやび}も名所^{めいじよ}を知らで越行^{こゆき}、峯^{みね}に登^{のぼ}りて悔^{くや}むものおし。これを見るに恨^{うら}み聞^きに嘆^{なげ}き、遂^{つひ}に筆^{ふで}の^みじかきを忘れ、其^{その}ほとりの石^{いし}をけづり、拙^{つた}なき言^{ことば}の葉^はをのこすものなり。

引用本文によれば、男女川は名所であるにもかかわらず山頂の「川のはじめ」が「細流」の為、遠方から尋ね来る風流人が見過ぐすので、『筑波山名跡誌』の著者上生菴亮盛が碑文を遺したそうです。以下、『筑波山名跡誌』に掲載された碑文をあげます。

『筑波山名跡誌』（尾道市立大学附属図書館蔵本）



〔碑本文文〕

つくばねの嶺より落るみな川ふかき恵みはず
 べらぎの五十七代をしろしめす陽成帝の御製に
 て、世々の歌人よみつづけ、此名の所むかしよ
 りかき集たる言の葉のは山茂山しげければ、短
 き筆に及ばれず、仰げば高く二なみに、いの字
 のごとくそばだてる、西はいざなぎ男神山、東

はいざなぎ女神山、分れし嶺のあひだより、岩
 ほの下をおのづから出る流のゆく末は、禁に落
 て淵となり、浪の花よる佐久良川、いたる磯辺
 の春がすみ、此面彼面としたひ来て、こゝろつ
 くばの嶺の川、愛ぞと指ていつまでも、朽ぬし
 るべに残す石ぶみ

明らかに和らぐ

みつのえたつの春

武原 上生菴誌焉

傍線部によれば、碑文は明和年間の壬辰の年、す
 なはち明和九年（一七七二年、十一月に安永に改元）
 の春のものと分かります。

本稿はじめに触れたように『百人一首図絵』は、
 文化四年に刊行されていますので、碑文が記されて
 から既に三十年余り経過していることとなります。
 歌意絵中の碑文が『菟玖波山名跡誌』中で亮盛が記
 述したものと同一だとすると、文化年間には、碑文
 自体が男女川周辺の名跡として定着していたとも言
 えるでしょう。

〔参考資料〕

・筑波山神社 HP (<https://www.tsukubasanjinja.jp/guide/midokoro.html>)

・年年是好年日は好日 (<http://cardamom.tsukuba.ch/>) 中、シリーズ「筑波山名跡誌」に書かれた場所を訪ねて」(2) 男女川(水源)

八〇番 待賢門院堀河

〔歌仙絵〕

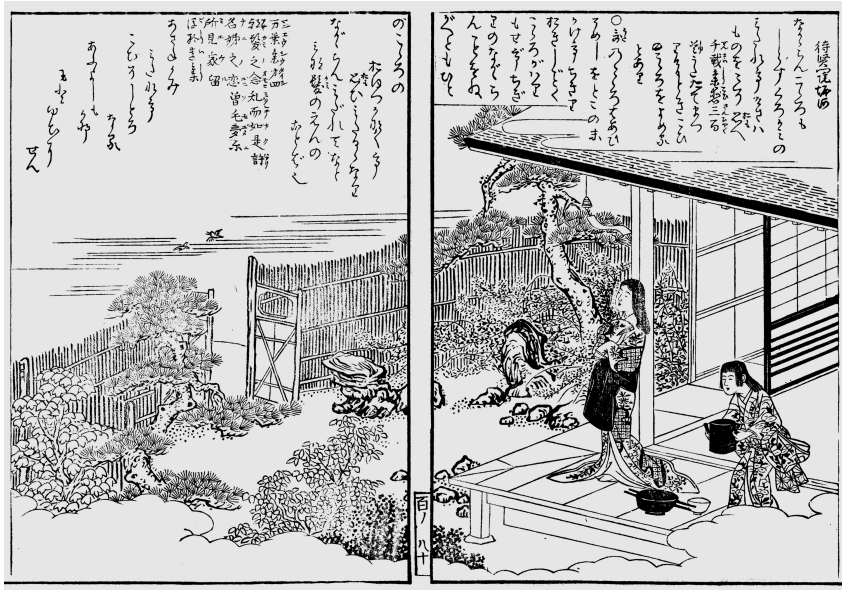


【翻刻本文】

待賢門院堀河たいけんもんいんのほりかは（待賢門院鳥羽院皇后、堀河神祇はくあきなかのむすめ）
伯頭仲女也はくとうちよんな

ながからん心もしらず黒髪のみだれて今朝は物をこ
そおもへ

〔歌意絵〕



【翻刻本文】

待賢門院堀河

ながらんこゝろもしらぞくろかみのみだれてけさはものをこそ思へ

『千載集』恋三、百首たてまつりけるととき、

こひのこゝろをよめるとあり。

○哥のこゝろは、あひそめしをとこの末かけてちぎりおきしごとく、こゝろがはりもせで、ちぎりのながらんことをねがへども、ひとのこゝろのおぼつかなくて、思ひみだるゝなり。ながらん、みだれてなど、みな髪^{かみ}のえんのことば也。

『万葉集』第四

朝髪之念乱而如是許名姉之恋曾毛夢尔所見家

留

『後拾遺集』

あさねがみみだれてこひぞしどろなるあふよしもがなもとゆひにせん

【解説】

「末長いあなたの心かも分らないので私の黒髪のように心も乱れてあなたと別れたこの朝は物思いにふけています」

この歌は『千載和歌集』に入集する、一夜を共にした男が帰った後の、女の気持ちを詠んだ少し切ない恋歌です。注にもあるように「長い」、「乱れ」といった「髪」の縁語が詠み込まれています。「長い」には男の末長い愛情が、「乱れ」には一夜を過ごしたものの、この後男がまた訪ねてきてくれるかはわからないことへの女の不安な気持ちがあらわされています。

では、歌意絵を見てみましょう。まず、何かを見つめ、立ち尽くす女が描かれています。その視線の先には開いた戸が描かれており、ここから男が帰ったこと、男が帰った後も女が戸を見つめ続けていることが読み取れます。また、戸の上には鳥が描かれています。鳥は朝を告げるものとして和歌にもよく詠まれるので、ここから時刻が朝であることが分かります。

では、この女の心情とは、いったいどのようなものだったのでしょうか。ここでは女のすぐ上に描か

れている風鈴に注目します。風鈴を見ると、短冊が大きく揺れており、そこからこの場面には風が吹いていることが分かります。さらに、女のいる場所は植物に囲まれています。風鈴をこんなにもなびかせる風が吹いていれば、きっと周りの植物も大きく揺れ、葉は音を立ててざわめいているはずですが、この木々のざわめきは、女の不安な心情を表しているのではないのでしょうか。男と一夜を過ごしたものの、女は人の心はおぼつかないからと、男との今後について不安に思っています。その心情がここではざわめく木々や風になびく風鈴と共鳴しているのではないのでしょうか。

さらに、注には『万葉集』と『後拾遺和歌集』にそれぞれ入集する和歌が示されています。『万葉集』歌では、親がなかなか帰ってこないことを不安に思う娘の心情を知った母親の思いが詠まれています。ここでは、当該歌のような恋情としての髪の乱れが詠まれているわけではありませんから、「髪」の縁語で「乱れ」が詠まれている例として挙げられたものだと推測できます。一方『後拾遺和歌集』歌では、寝起きの髪の乱れと恋心の乱れを掛けて、どうしても恋しい相手に会いたいという心情が詠まれています。

す。ここでは、髪のはれは恋情によるものとされており、当該歌と似た趣向の歌が挙げられていると考えられます。他の古注釈に目を向けてみると、当該歌の本歌として紀貫之の歌を挙げているものが多いものの、『龍吟明訣抄』など、いくつかの古注釈は『百人一首図絵』と同じ二首をあげています。『百人一首図絵』は、それら古注釈と同じように縁語のはたらきなど、当該歌を考える際の手助けとして先行歌をあげつつ、歌意絵をあわせながら、一首についてより深い理解を提示しているのではないでしょうか。

八九番 式子内親王

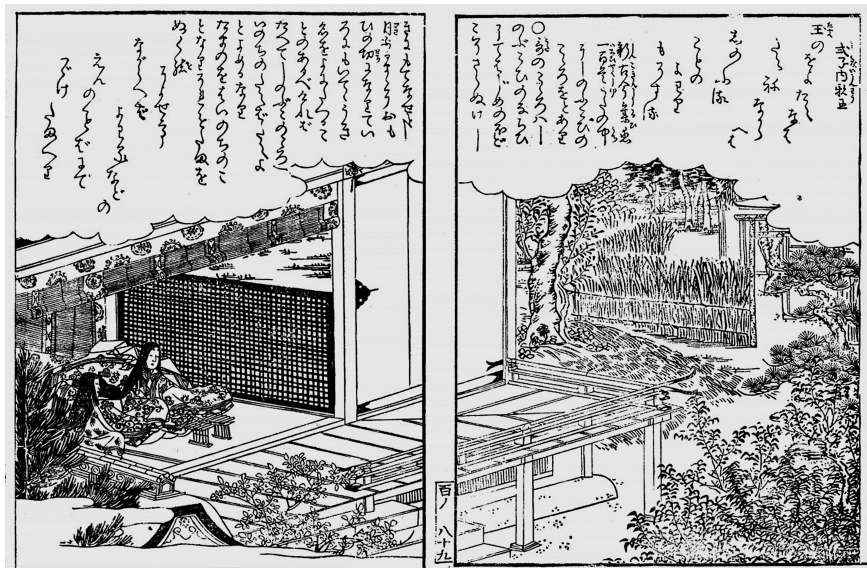
〔歌仙絵〕



【翻刻本文】

式子内親王（御父後白河院、御母從三位成子、大納言季成卿女也。齋院准三宮。）
 玉たまのをよ絶たえなばたえねながらへば忍しのぶることのよはりもぞする

〔歌意絵〕



【翻刻本文】

式子内親王 しきないしんわう

玉たまのをよたえなばたえねながらへばしのぶることの
よわりもぞする

『新古今集』恋一、百首うたの中にしのぶこ
ひのこころをとあり。

○哥うたのこころは、しのぶこひのならひにて、はじめ
のほどこそさらぬけしきにもてなせ、とし月つきふる
まゝにおもひの切せきになりて、いろにもいでゝ、うき
名をよにたつることのあるべければ、たへてしのぶ
とのこころ、いのちのたえばたえよとよめるなり。
たまのをは、いのちのことなり。それをたまをぬく
緒をによせて、ながらへば、よわるなどのえんのこと
ばにてつづけたまへり。

【解説】

「わたくしの命よ、絶えるならば絶えてしまいな
さい。もしこの命が、玉を貫く緒が伸びきってしま
うように、絶えず生きながらえてしまえば、思いを
表に出すまいと堪えているこの気力も弱っていつて
しまいます。」

当該歌は自身の中で燃えている恋の思いの激しさを詠んだ歌です。歌意絵の注にもあるように『新古今和歌集』巻第十一の恋歌一に収録されています。歌の中の「玉」は命・魂などを示し、「緒」はその命や魂を肉体につなぎとめているものを示しています。注にある通り、玉に通ず紐と関連させて、紐が「ながらふ」や紐の張りが「よわる」といったような、「緒」の縁語が詠みこまれています。

式子内親王は後白河院の第三皇女で、和歌は俊成に師事していました。『新古今和歌集』に四九首も入集し、『百人一首』にも皇女として歌がとられているのは式子内親王だけです。当時は、皇女が和歌を詠むということは非常に珍しかったようです。

さて、歌意絵には屋敷の中に二人の女性が描かれています。式子内親王は短冊のおかれた台の前に座っています。『基箭百人一首抄』や『百人一首繪抄』など、同様の絵入り本には短冊を置いた台の前に座る姿ではなく、箏を弾く姿が描かれています。これは藤原定家の日記『明月記』における「入道殿如例引卒令参萱御所、斎院行有御拜箏事云々」という式子内親王に関する記述が関係していると推察されます。では、歌

意絵における式子内親王と短冊との関係とは何なのでしょう。台上の短冊は式子内親王が和歌を書きつけた短冊ではないでしょうか。『基箭百人一首抄』や『百人一首繪抄』が『明月記』によった箏を奏でる式子内親王をイメージしたものだとする、『百人一首図繪』は皇女でありながら和歌に親しんだ式子内親王の歌人としての側面を絵画化したのかもかもしれません。

或いは恋に身を焦がす式子内親王を描いたのでしょうか。式子内親王と定家の二人は恋仲にあったという逸話が残っています。謡曲『定家』の存在や、『小倉山荘色紙形和歌密註』、『百人一首講義』など一部の古注釈にも言及が見られることから、そういった式子内親王の姿が歌意絵として描かれていても良さそうです。

現在では、逸話は事実ではないと言われていますし、そもそも二人の恋の逸話を語る際に引き合いに出される当該歌は「忍恋」の題詠ですから、激しく抑えがたい思いからこの歌を詠んだ訳ではないかもしれません。それでも、謡曲『定家』や一部の古注釈の存在から歌意と逸話とを結びつけた絵が成立する余地は十分にあるでしょう。

〔参考資料〕

- ・『伊勢物語大成／百人一首繪抄／三十六人哥仙／六歌仙并二評』（国文学研究資料館新日本古典籍総合データベースより）
- ・島根大学付属図書館桑原文庫本『百人一首講義』（新日本古典籍総合データベースより）
- ・高知県立高知城歴史博物館山内文庫本『小倉山荘色紙形和歌密註』（新日本古典籍総合データベースより）

―なご・りようが 日本文学科二年生―
―ゆらき・ひなた 日本文学科三年生―
―ふじかわ・よしかず 日本文学科教授―

〔付記〕

本稿は、令和二度尾道市立大学学長裁量教育研究費による研究成果の一部である。